



La Maison Jaune
(黄色い家)
1960年
ディープ・エッチ、アクアチント

駒井哲郎

1920-1976

Tetsuro Komai Retrospective

昭和9年、駒井家に一冊の雑誌が送られてきました。それは、版画家で画商も営んでいた西田武雄が版画の普及と啓蒙のために創刊した月刊誌『エッチング』でした。当時、紳士録に掲載されていた駒井の父親に宛てて送られてきたのです。この『エッチング』によって、14歳の哲郎少年は初めて銅版画の世界を知ることになりました。翌年、駒井は西田武雄が主宰する日本エッチング研究所に通う中で、ホイットスラー、ルドン、レンブラントなどのオリジナル銅版画に初めて接します。ひとりの少年が、銅版画家としての宿命を背負った瞬間でした。

「・・・少年の時、あの初めて銅版画を見た時の戦慄にも似た深い感動と、心のうちに準備されていて銅版画を受け入れて自分のメチエにした」と云う願望をもたらし幼い時から無意識に蓄積されて来た心情とにそむくわけにはいかなさうと思つようになった。「白と黒の造形」小沢書店、1977年。駒井が50歳の時に執筆したエッセイには、当時の彼自身の心境が綴られています。駒井哲郎は56歳で亡くなるまで、銅版画一筋でした。銅版画の表現を

通じて、眼にみえる現実と眼にみえない心の内を追い求めた才能あふれる芸術家でした。銅版画の表現を切り開き、後進を育て、銅版画という芸術ジャンルを確立した駒井は、戦後日本の銅版画の先駆者として、今もなお高い評価を受けています。夢と現実が織りなす駒井の作品は、私たちをいつでも想像豊かな世界へ誘ってくれるのです。

本展覧会では、駒井哲郎の軌跡の全貌を資生堂名誉会長の福原義春氏が蒐集した約500点の一大コレクションによって紹介いたします(期間中、全作品総入れ替えの2部構成をご覧ください)。慶応中学時代の貴重な初期作品から、国際展で受賞し世界的に高い評価を獲得した1950年代、色彩豊かなカラー作品やモノタイプに取り組み、さらにブックワークに新たな地平を切り開いた1960年代以降から晩年に至るまで、本展覧会は銅版画に生涯を捧げた駒井哲郎の回顧展となります。

夢と現実が織りなす版の迷宮・駒井ワールドへ、さあ、みなさんで出発しましょう。

(杉原 聡)

駒井哲郎

1920-1976

Tetsuro Komai Retrospective

第I部 2012年1月5日(木)~1月22日(日)

第II部 2012年1月25日(水)~2月12日(日)

開館時間/午前9時30分から午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日/毎週月曜日(1月9日開館、翌10日休館)

1月24日(火)は展示替えのためご覧いただけません。

観覧料/一般500(400)円 高大300(240)円

()内は20名以上の団体料金

中学生以下、65歳以上、障がい者手帳をお持ちの方は無料

主催/郡山市立美術館 協賛/SHI/EIDO



船着場のある風景 1935年
エッチング



東の間の幻影 1951年
サンドペーパーによるエッチング